

## 保育の場で子どもの発達を支える(1)

# 障害をもつ子どもの育ち

大村禮子

はじめに

筆者はA市の委嘱を受けて、①障害をもつ子ども、  
発達が気になる子どもに対する支援 ②保護者に対  
するケア ③関係機関との望ましい連携体制構築の  
三つを目的とする発達支援事業「巡回相談」の相談  
員として、A市内保育所六か所と幼稚園二園を継続  
して年二回訪問しています。訪問先では、通常の保  
育面で相談の対象となった子どもを観察し、その  
後の保育者とのカンファレンスで園からの質問に答

えながら、保育所保育指針にある「子どもが現在を  
最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎  
を培う」ために保育の場でできることを保育者と一  
緒に考えています。

### 行動観察からわかること

保育所や幼稚園を訪問すると、毎日子どもたちと  
かわり、一人ひとりの育ちや気持ちの動きを敏感  
にとらえて、保育を工夫し、何とか子どものもつて  
いる力を引き出してあげたいと願う保育者の熱意を



切に感じます。年二回しかない観察場面を通して、大切なことを見落とさず、その熱意に応え、相談してくる内容に満足のいくフィードバックをしていくことは大変難しいです。

筆者はこの巡回相談の仕事を始める前から、現在も継続して十年以上児童相談所で非常勤の児童心理司として、要保護家庭児童をはじめ、発達相談や療育手帳の判定に訪れる子どもたちの知能検査や発達検査、所内での個別の行動観察を行ってきました。

検査を行って出される数値は、子どもの発達を理解する一つの手がかりではあり、子どもが福祉の制度上の支援を受けるためには必要ですが、同じ数値が出ても、一人ひとりの子どもの課題への対応や理解、表現の仕方はすべて異なります。緊張や不安の強い子どもが、知らない場所ですさまじな検査を受けることは、多大なストレスがかかってしまいます。そこで、検査だけでなく、個別の遊びの場面で行動観

察すること、数値に表れてこない生活上必要な力の強さや弱さがわかってきます。そして、その子どもがもつ力の強さと弱さを理解して、保育者や保護者にわかるように伝えることが大切です。

### 巡回の観察で見えること

巡回では、個別の行動観察と異なり、集団の保育の中で子どもを観察します。筆者は、まず①相談の対象となった子どもが発達過程のどこに位置するかを見定め、②子どものもつ力の強さや弱さを保育者や他児との集団場面でのような時にどのような形で出すのかを見ます。②では子どもが察知していると思われるその場の雰囲気、流れる空気や音、子どもたちの声などを五感で感じる一方、日々、さまざま課題を抱えながら保育する保育者とは異なった立場から、客観的に子どもや集団を見ることで、当事者である保育者には気づきにくい園の特性、保育



環境、保育者と子どもとの関係、他児との関係などを見ています。保育者に観察して見えたことを伝え、一緒に考え、園の特性を生かして、日々の保育の中で保育者がいていねいにかかわっていくと、必ず子どもたちに成長が見られます。その成長を保育者と一緒に喜べる時、この上もない幸せを感じます。

### 保育者との協働

障碍をもつ子どもに対する保育者の温かなまなざしとかかわりは、周囲の子どもたちのかかわりをも変えていきます。多様なニーズに応えなければならぬ保育園の中で、担当保育者がさまざまな課題を一人で抱え込むことなく、園全体でサポートしながら子どもと安定してかかわれるようにすることは大切です。少し離れた別の視点から子ども自身と子どもを取り巻く環境すべてを含む保育全体を見渡し、観察から見えたことを正確に伝えていくことで、保

育者に気づきと工夫が生まれていきます。こうした取り組みの具体的な例を挙げてみましょう。

### 障碍をもつ子どもの育ち

保育園で支えられ、一緒に生活していく中で、障碍をもつ子ども周りの子どもたちも共に育つということとを教えてくれた忘れない事例があります。

〈事例B子〉発達遅滞との診断、四歳一か月から入園。入園して一年は三歳児クラスに入る。療育手帳A所持、療育機関に入園前は月二回、入園後は月一回通い、言語聴覚士、作業療法士から三十分ずつ指導を受けている。

入園当初の発達状況について、担当保育士は「歩く時に体のバランスが悪く、不安定。段差がある所では、壁に手をつけて、上り下りする。食事の時に椅子に座ることもできず、床に座って食べ、スプーンは持つが、すくうことは難しい。箸やはさみはま



だ使用できない」と記載しています。言語理解は、身近にある物の名前もわかっていない物のほうが多く、日常の指示は理解できることもあります。言葉は「あゝあゝ」という発声のみ、指さしと身振りで意思を伝えていました。そして入園当初は担当保育士が必ずそばについて、信頼関係を築き、しだいにほかの職員や他児とのかかわりを増やしていったようです。

〈行動観察場面1 B子四歳三か月〉

入園一か月経った自由遊び時間の園庭で、B子はほかの子どもから離れた場所に一人座りこんで片手で砂をすくっては落とし、落としした砂を両手で触っている。筆者がそばにそっと寄って名前を呼ぶと、こちらを見て笑顔を見せる。筆者がそばにおいてあるカップを取って、その中に手で砂を落としてみせるとB子も手で砂をすくってカップに入れ始める。

この場面では、B子の周囲には保育士も他児もいなかったため、筆者は観察だけでなく、かかわりをとることでB子との世界を共有しました。

〈行動観察場面2 B子四歳三か月〉

給食の前に三歳児がクラスに集まり、B子は後ろの端の席に座る。担任がクラスの子どもたちに向かって話を始めるが、B子は担当保育士と筆者の姿が目に入ると、立ち上がってこちらのほうばかり見る。B子のそばにいた子が手で押さえて座らせようとしますが、いったん座ってもすぐにまた立ち上がり、ほかにも立ち上がる子、話を始める子とクラス全体がざわめく。

担当保育士とそっと観察に入りましたが、日ごろ親密にかかわってくれる担当保育士のほうにB子の注意は向かってしまいました。この二つの行動観察場面と事前に園から伝えられた情報を基に、

① B子がまだ一人で感覚遊びを楽しんでいる発達



過程にあること

②できないことをできるようにさせるのではなく、いまできることを一つずつ確実に伸ばし、遊びや生活の中で、保育者や他児が楽しそうに取り組む姿を見て、自然にまねしながら、できることを増やしていけること

③集団全体に向けられた言葉だけでの伝達は理解することが難しく、注意がそれた時のB子の行動はほかにも刺激を受けやすい子どもの個々の行動を誘発すること

を伝えました。そして、B子が活動の内容を理解し、意欲をもって参加するためには

①B子の座る位置を保育者の行動が良く見えるような位置に固定する

②B子が安定するために、保育者の指示をしつかり理解し、ゆとりをもって活動できる子どもがB子のそばに座るように配慮する

③B子が安定するまでクラス担任とは別の担当保育士が補助としてB子のそばにつく

④伝達方法は言葉だけでなく、実物を見せる、保育者が手本となって動いて見せるなど理解しやすい方法を取り入れる

という提案をしました。

この園の良さは園長をはじめとして職員の仲が良く、何事にもおおらかで、子どもに対して構えず、自然に接していることです。そのためにB子のようにゆったりとマイペースでも、子どもたちがそれを受け入れる土壌が育っています。巡回でのフィードバックを受けて、園ではそれまでのいいないなかかわりに加え、日々の活動での伝達方法や座る位置を工夫し、二か月ごとに個人の期間案を作成し、個人日誌をつけて、園長、担任、担当者で話す機会を増やし、会議ではB子の様子を全職員に伝え、共通認識するように努めてくれました。さらに通っている



療育機関での作業療法士、言語聴覚士との実施内容について記載してもらい、見学して情報交換する機会をもちました。こうした園の取り組みの結果、約一年半後の巡回では、成長したB子の姿が見られました。

### 〈行動観察場面3 B子五歳十か月〉

給食の前にクラスで集まり、B子は保育士の手の動きや絵本がよく見える最前列の真ん中に座っている。筆者や担当保育士に気づいてニコニコ笑顔を向けるが、座ったまま担任の指人形を使ったお話にじっと目を向けている。時々周囲の子どもが笑うと、その顔を見て、一緒に楽しそうな笑顔を見せる。お話が終わると、クラス全体が落ち着いて食事の前の手洗いなど一つの流れに従って動き、B子も周囲の子どもに助けられ、食事が始まると隣の子と顔を見合わせながら楽しそうにフォークを使って一人でスパゲッティを食べる。

〈行動観察場面2〉と比べ、できることが増え、周囲の子どもと一緒にいて楽しそうです。

### 巡回相談はかわる人をつなく橋渡し

担当保育士の巡回初期の相談は、言葉が出るためにはどうしたらよいか、一人で食べられないために手先の訓練をしたほうがよいのかといった質問が中心で、できないことに注目し、できるようにさせたなどの思いが強く出ていました。巡回や研修を続けるうちに保育園でできることと療育機関に任せることを分け、お互いの情報交換をすることで、園内ではB子のできることに注目し、無理なく生活の場で、できることを伸ばし、楽しく過ごせる場としての保育体制が定着しました。

巡回相談は自ら保育者と協働しながら、障碍をもつ子どもにかかわる人と人をつなぐ橋渡しだと思えます。

(淑徳短期大学兼任講師)